

2. 非鉄金属企業の日常 — スラバヤ/グレシクでの日常生活について —

PT. Smelting 松本 修昌

1. PT. Smelting の紹介（設立～現状）

PT. Smelting（以下、PTS 社）は、1991年にフリーポート・マクモラン社がインドネシア政府と30年間の採掘権の契約を締結した際、銅製錬所の建設を要請された同社の現地法人であるPT. Freeport Indonesia社（以下、PTFI社）が1994年に三菱マテリアル社を招聘、1996年に設立された会社で、ジャカルタ首都特別州に本社、東ジャワ州グレシク県に製錬所を有する、現在に至るまでインドネシアで唯一の銅製錬所である。



PTS 社グレシク製錬所の全景

製錬所設置にあたり、グレシク県が選ばれた理由としては、隣接する国営肥料会社のPetrokimia Gresik社で稼働中であった硫酸プラント1基が老朽化しており、製錬所の建設と産出される硫酸の購入を同社が強く望んだことが挙げられる。このため、同社からは事業用地の貸与や工業用水の供給など様々な便宜が供与されている。また、製錬所建設予定地はグレシク県の臨海地区に所在しており、銅精鉱や海外からの資材の荷揚げ、製品の出荷等



ジャカルタとスラバヤ市の位置関係（Google Map）



グレスック製錬所とスラバヤ市街 (Google Map)

大きな港湾施設を有するスラバヤ港の利用が容易であるといったメリットがあったことも大きな要因であった。

このような環境下で建設された製錬所は、設立当初は電気銅の年間生産能力が20万tであったが、以降3次にわたる拡張工事の実施により、現時点では電気銅の年間生産能力が30万tになるなど、インドネシア経済の成長と共に大きく発展してきた。しかしながら、これまで順風満帆に発展してきた訳ではなく、海水配管の破損による長期間の操業停止や、労働組合によるストライキといった労働問題、PTS社に起因しない

環境問題に端を発した地元問題、税務問題、法制度改正に伴う混乱に起因する許認可問題等々、数多くの困難を乗り越えて現在に至っている。これも偏に諸問題発生時に真摯に対応したPTS社関係者の努力と三菱マテリアル社のサポートがあつてのものである。

なお、2022年8月末時点でのPTS社の概要は以下のとおりである。

株主構成：三菱マテリアル 60.5%、PTFI社 39.5%

電気銅生産能力：30万t／年

従業員数：386人（駐在員15人、インドネシア人371人 ※ジャカルタ本社駐在員1名、インドネシア人8名含む）

2. スラバヤ/グレスックでの食事/日常生活について

ここでPTS社グレスック製錬所が所在するグレスック県及び駐在員が居住するスラバヤ市について紹介したい。



製錬所近くの屋台（ワルン）での日本人駐在員（右から2人目が筆者）の昼食風景。この日は全員がRawon（東ジャワ州発祥の牛肉のスープで真っ黒な色が特徴）を注文。

インドネシアは、国民の約90%がイスラム教を信仰するなど、世界で最もムスリムの多い国家であり、その中でも最も人口が多いジャワ島に初めてイスラム教が伝わった地域が、ジャワ島東部に位置し、インドネシア第2の都市であるスラバヤ市から北西約20Kmにあるグレスック県である。このような背景からか、グレスック県では店舗でアルコールが販売さ



駐在員が昼食で注文した Rujak Cingur
(特にスラバヤ市の伝統的食べ物。各種野菜や餅、テンペ等に濃厚且つ辛いソースを和えて食べるサラダ)



グレスック県のレストランでのローカルスタッフの食事風景。Buntut Goreng (牛テールの揚げ物) や Sop Buntut (牛テールスープ) は多くのインドネシア人の好物。

インドネシア料理について紹介したい。当地では、日本でも有名なナシゴレン (焼き飯)、ミーゴレン (焼きそば)、テンペ (インドネシア納豆) といった料理以外にもソトアヤム (鶏肉のスープ)、ラウオン (牛肉のスープ、東ジャワ州起源) といった旨味の強いスープや、サンバル (チリソースの一種) やココナッツソースといった味の強い調味料が多用された料理が多く食べられている。どの料理も美味ではあるが、インドネシア料理はすべからく油の使用が多く、また量そのものも多い為、意識的に食事量を調整しないと、成人病まっしぐらの道をたどりかねないので注意が必要である (インドネシア人は年配の方ほど恰幅の良い人が多いように思われるが、長年インドネシア料理を食べ続けた影響があるものと思われる)。

続いて駐在員やインドネシア人の生活スタイルについて紹介したい。

スラバヤの日本人会には、約 400 人弱 (実際にはもう少し多い) が登録されているが、300 万人都市であるスラバヤの規模や日系企業の進出状況から見れば、在住者の数はかなり少ない (ジャカルタは 1 万人強の日本人が在住)。ただ、ソフトボールやサッカー、テニス、コーラス等、クラブ活動は中々に盛んであり、各人が交流できる環境は整っている。我々駐在員の日常としては、基本的には社有車で移動ということもあり、日本のように赤提灯に誘

れておらず、ホテルでもアルコールを注文することは極めて困難である。我々駐在員は、スラバヤ市内に在住しているので、日常生活で飲酒を全く出来ない訳ではない。スラバヤ市には幾つもの巨大なショッピングモールがオープン、中心部のトゥンジュンガンエリア等は、日本の新宿・渋谷といった大都市と変わらぬ賑やかさを見せており、酒類を提供するレストランも数多くある。ただし、インドネシアではウイスキー・日本酒・焼酎の入手は極めて困難なので (※購入出来たとしても極めて高額)、日本から当地への出張の際、このような酒類を土産とすると現地駐在員から大変喜ばれる (酒を嗜まない方には全く関係の無い話で恐縮だが)。

食べ物については、宗教的な理由により豚肉が使われる料理を目にする機会は限られているが、スラバヤ市には何軒かの日本料理屋があり、日本の食材が売られているスーパーもあるので、生活面でそれ程の不便は感じない。ここで折角なので、少し

われて一杯、ということは余り無く、平日は自宅～会社の往復となり、偶に職場やサークルの仲間と飲みに行く、という生活をしている人が多い。週末は多くの駐在員が職場・サークル仲間とゴルフやソフトボール、サッカー等の活動を通じて交流を深めている。また、インドネシアは観光大国であり、我々駐在員が住んでいるスラバヤからも近隣に有名な観光地（バリ島や世界遺産であるボロブドゥール遺跡等）が多数存在していることもあり、これら観光地に旅行をする人も多い。

次にインドネシア人の生活スタイルであるが、地域各所に設置されているモスクの拡声器から1日5回大音量で流れるアザーン（礼拝への呼掛け）が生活に根付いている。最初のアザーンは夜明け前に流れることもあり、駐在員の中にはこの音量で目を覚ます人もいる。ムスリムにとって、祈禱は極めて重要な行為であり、従業員の90%以上がムスリムであるPTS社でもモスクの設置や祈禱時間の確保等、従業員の宗教的活動に配慮している。また、ムスリムにとって最も重要なイベントがラマダン（断食月）とレバラン（断食明け大祭）である。ラマダン期間中、ムスリムは日の出から日没まで一切の食事を断つこととしているため、PTS社でも、この期間中は日没後直ぐに栄養補給を出来る様に軽食を用意するなど、従業員の健康管理に特に配慮する期間である。約1か月のラマダンを経て迎えるレバランは、日本での正月のようなものであるが、ムスリムにとってはラマダン期間中に徳を積むことで全ての罪が許されると考えられている日なので、重要度は日本人の正月に対するそれとは比較にならない。なお、レバラン前後は公式に祝日となり長期間の休日となるため、多くのムスリムが故郷に帰省して親族と過ごしている。このレバラン前後の期間は、官公庁も殆ど機能しなくなるため、各種許認可やVISA手続き等はこの時期を外す必要がある。何れにせよ、宗教や価値観、歴史的背景等、日本とは大きく異なる当地で事業活動や生活をしていく上で、インドネシア人の価値観や生活スタイルを尊重していくことが極めて重要である。

3. PT. Smeltingの今後について

最後にPTS社の今後について言及したい。PTS社は1996年の設立以来、三菱マテリアルグループの東南アジアの重要拠点、且つインドネシア唯一の銅製錬所として、インドネシアや東南アジア諸国に高品質の電気銅を安定的に供給してきた。このような中、インドネシアにおいて2009年に施行された新鉱業法により鉱山会社に鉱物の高付加価値化が義務付けられており、PTS社についてもPTFI社が運営するグラスベルグ鉱山の付属製錬所としての側面が強くなってきている。こうした状況を踏まえ、三菱マテリアル社がPTFI社と協議を重ねた結果、次の項目等について合意し2021年11月25日に正式に決定された。

- ・ 鉱物の高付加価値化の一環として、PTS社の拡張工事を行う。
- ・ 拡張工事に係る費用については、PTS社は全額をPTFI社から融資を受けて調達する。
- ・ 拡張工事の完工を条件として、PTFI社からPTS社への融資額全額を簿価純資産方式でPTS社の新株に転換（増資）する。

これにより拡張工事が完工、PTS 社の増資の完了をもって（2024 年前半）、PTS 社は三菱マテリアル社の連結子会社から持分法適用関連会社に異動予定である。また、拡張工事に関する協議と並行して、今後の PTS 社の運営方針について三菱マテリアル社と PTFI 社が協



2年に1度の大型定期炉修工事の起工式の様子
(ライスコーンをカットする佐藤社長(右から2人目))。

議した結果、2023 年より PTS 社の運営方法が変更されることとなった。現在、PTS 社は鉱山会社から銅精鉱を購入した上で、電気銅、スライム他副産品を生産し、それらを顧客に販売することで利益を得ているが、運営方法の変更後は PTFI 社のみから銅精鉱の製錬の委託を受ける受託製錬会社に変更となる。なお、PTS 社の受託製錬化後も、

三菱マテリアル社は 20 年以上にわたる PTS 社の操業経験を活かして、インドネシアに新設した子会社を通じて PTS 社の操業や事業遂行に従前同様深く関与していく予定である。我々駐在員（※新社に転籍予定）も PTS 社の事業活動のサポートに全力を尽くすことを通じて、PTS 社や近隣住民といったステークホルダーのみならず、インドネシアの更なる発展に寄与していきたい。

以 上